

(5) 今後の課題

- ア. 生物基礎は2単位のため、授業時間の確保が難しく、行えるタイミングが長期休みの前後。次年度以降は内容をもう少し精査する必要がある。新しい内容を盛り込んだため、生徒は消化不良になっていた面もある。
- イ. 外来生物(植物)の繁殖調査はGoogle レンズを使用し、Google フォームで情報を回収するまで良いが、もう少し発見場所の具体性を持ってもらえないことにはプロットして図式化するのは難しい。
- ウ. ジグソー活動資料の簡素化。SDGs については、すべての目標を伝えず、生物分野における一部を切り取って考えさせるというやり方を検討する。

5 総合的な探究の時間「日本文化史研究(近現代)」

総合的な探究の時間 (日本文化史探究(近現代))	受講生徒:3年生27名	担当者:教諭 明戸 冬華
-----------------------------	-------------	--------------

(1) 授業のねらい

本授業は生徒たちの課題発見・解決能力の資質向上とプレゼンテーション能力の育成を狙いとしました。授業目標も、通年「小川町の抱える地域的な課題を自分で発見し、それをどう解決するか考え、発表する」に設定し、生徒たちには授業開始当初から、小川町について学び、更によりよくするための方法を高校生の視線で考えることを意識させた。

(2) 実施報告

ア. 実践授業の取組

4月	14日	(水)	⑤、⑥	おがわ学オリエンテーション【全体】
4月	15日	(木)	②	授業ガイダンス
4月	21日	(水)	⑤、⑥	小川町について調べる(インターネット)
4月	22日	(木)	②	小川町について調べる(インターネット)
4月	28日	(水)	⑤、⑥	小川町について調べる(町立図書館訪問)
5月	6日	(木)	②	小川町について調べる(統計資料)
5月	13日	(木)	②	小川町歩き事前学習
5月	26日	(水)	⑤、⑥	小川町歩き
5月	27日	(木)	②	小川町歩き事後学習、取り組む課題検討
6月	15日	(火)	③、④	小川町政策推進課 出前授業【全体】
6月	16日	(水)	⑤、⑥	課題ごとのチーム分け、取り組む課題決定
6月～7月(授業時数4時間)				チームごとの話し合い、中間発表準備
7月	14日	(水)	午前	中間発表会【全体】
9月～12月(授業時数19時間)				チームごとに課題解決学習、発表準備
11月	20日	(土)	④	学校説明会にて中間発表②
11月	27日	(土)	午後	伝統工芸開館にて代表生徒発表。
12月	22日	(水)	午前	同級生や後輩生徒に対して成果発表【全体】

イ. 体験的・課題解決的な学習活動


小川町の問題を自分たちで発見するためには、まずは小川町そのものについて知ることが重要であると考えた。1学期当初はインターネットや図書館を用いた調べ学習、また統計資料をもとに「数値」から小川町を知る学習を行った。更に、実際に小川町を歩き、町役場の人に話を聞くことで様々な視点から町の現状を探った。

6月下旬からのテーマ決めで生徒たちは、人口減少やその年代層の偏りに注目した。日本全体の少子高齢化、地方の労働人口の減少については、1、2年の授業から学んでいることであるので、そこに着目するのは予想できていた。

しかし、それ以降の解決策については生徒たちの興味関心によって方向性が大きく分かれた。

人口減少を解決するため、起業するためのサポートについて考えるグループ、子育て層を増やすことを考えるグループ、町に学校を作り学生を増やそうとするグループ。また、知名度をアップし小川町の認知度高めるため、パンフレット作成に取り組むグループ、ゆるキャラやふるさと納税などで収益を増やそうとするグループ。更に、これからの日本で人口比を大きく占めることになる高齢者にとっても過ごしやすい町を作ろうと考えるグループ……。担当が想像していた以上に、生徒たちは小川町についての問題を深く考え、解決のためのユニークな案を出しあっていた。実際に、それが可能か不可能かという視点はグループ内で検討する必要があるものの、生徒たちが持っている個性や思考能力を活かそうとする意志を強く感じた。

ウ. 学習成果物

<div data-bbox="189 651 761 965"> <p>私たちが考える小川町の課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ・少子高齢化 <p>理由 (どうしてこの課題に注目したか)</p> <p>小川町の役場の方々の話で「高齢化により、働く人が減り税金を納める人が減っていて、年金をもらう年齢が上がっている。」という事など、少子高齢化によって引き起こされる問題の重大さを気づいたから。</p> </div>	<div data-bbox="802 651 1367 965"> <p>課題解決のために</p>  <p>小川町を活性化させるために、空いている土地や森林を活用し、なおかつたくさんの若者に来てもらうためには、小川の土地を農業の専門学校として有効活用すればいいと考えました。</p> </div>
<p><u>グループ4の発表スライド①</u></p> <p>少子高齢化を課題とし、その課題を選んだ理由を説明。実際に小川町役場の方にお話を聞いたことが、生徒たちが問題を考えるきっかけになっている。</p>	<p><u>グループ4の発表スライド②</u></p> <p>小川町の地図を眺めることで活用できる土地の広さも確認。商業施設は利益の問題で設置できないが、教育施設ならどうだろうと方法を模索している。</p>
<div data-bbox="189 1350 761 1664"> <p>小川町のゆるキャラ</p> <p>星夢ちゃん 2006年に誕生</p> <p>いつの日かみんなの夢や希望を叶えるために「星に願いを」を込めて命名されたのが「星夢ちゃん」です。</p> <p>2016年には、七夕まつりだけでなく、町全体をPRするキャラクターとして昇格。今では、一年を通して町内外の様々なイベントに参加し、町のPR活動をしているそうです。</p>  </div>	<div data-bbox="802 1350 1367 1664"> <p>ゆるきゃらグランプリのエントリー数の推移</p> <p>エントリー数と年代</p>  <p>このように、2014年以降エントリー数は減少し続け、ゆるきゃらグランプリは10回目を2020年を最後を終了しました。エントリー数が減少しているように、ゆるきゃらの需要も年々少なくなっていることがわかります。</p> </div>
<p><u>グループ8の発表スライド①</u></p> <p>現存する小川町のゆるキャラを調査。新しいゆるキャラを作る、星夢ちゃんにキャラクター設定を加える、SNSへ露出するなどの方策も考えた。</p>	<p><u>グループ8の発表スライド②</u></p> <p>調べていくうちにゆるキャラの流行が終わりつつあるという問題点も数字から指摘。その中で「生き残っている」キャラはどんな特徴があるのかも分析した。</p>



グループ7の発表スライド

バリアフリーという視点から小川町を考えたグループ。実際小川町を歩くことで、高齢者にとって危ないところなどを指摘することができた。スライドにも撮影した写真を用いて、説得力を増した。

グループ7の発表風景

小川町の伝統工芸会館で行った「おがわ学フォーラム」での発表。町の方からもご意見をいただき、生徒たちは自分たちの案を新たな視点から再度検討する必要性を感じることができた。

(3) 分析と考察

生徒たちがユニークな解決策を持ち検討していく中、発表日時が告知されると、どうしてもそちらに注目してしまい、結論を急いでしまう・小さくしてしまうところがあった。町の人に話を聞いてみたい、アンケートを取ってみたいという気持ちを持っていた生徒も、発表にまとまりを持たせることを優先してしまい、当初よりも小規模な調べ学習で終わってしまったグループもある。教員からは「ここで解決策をすべて示す必要はない」「まだ調べ途中ならそれで良い」ということを、途中からではなく最初の共通事項として意識させるべきだったと考えている。

目標の一つであったプレゼンテーション能力については、中間発表、学校公開、最終発表と回数を重ねるたびに発表への抵抗感が下がっていくのを目に見えて感じた。声量やスライドの見えやすさなども発表を見る人の立場になって考え、よりよいものにしたいという意識はクラスのグループすべてに芽生えていた。発表日を決めることによって生徒がゴールを決めてしまうという難点もあるが、何度も発表機会を設けていくことで人前が出るのさえ嫌がっていた生徒が、堂々と発表できるようになっていく姿は生徒の成長を実感することができた。

(4) 研究成果・今後の課題

授業者が総合的な探究の時間の授業者という形で「おがわ学」に関わるのは1年ぶりになる。事業が始まったばかりで「小川町について学ぶ」という経験が教員・生徒ともに手探りでであった2年前と違い、1年生のときから「おがわ学」に触れてきた生徒たちはあらかじめ「課題発見・解決を行う」という意識をもって授業に臨んだ。そのやる気を活かし、継続させるためには、教員側からの働きや地域との交流、学校から飛び出すフィールドワークを更に行っていく必要があると感じた。

6 総合的な探究の時間「日本文化史研究（古典）」

総合的な探究の時間 (日本文化史研究(古典))	受講生徒:3年生11名	担当者:教諭 山野 龍太郎
----------------------------	-------------	---------------

(1) 授業のねらい

総合的な探究の時間（おがわ学と日本文化史研究）では、「おがわ学」で日本文化を探究する題材として、小川町ゆかりの『万葉集』を取り上げる。多様な資料を調べる方法を学び、地域に関する興味を深めた調べた上で、『万葉集』の和歌を鑑賞したり、小川町の遺跡を調査し

たりする。具体的には、小川町に設置された万葉モニュメントを足がかりにして、自身で選んだ和歌の大意・背景・鑑賞などを報告することで、『万葉集』に関する知識を深めて共有する。さらに、『万葉集』を地域資源として活用する方法など、現代の小川町と関連した問題として、小川町と『万葉集』の探究を進めて、問題解決能力を養成することを目標とする。

(2) 実施報告

ア. 実践授業の取組

日本文化史研究では、国語と言う教科の枠組みを基本として、小川町ゆかりの『万葉集』を題材とした授業実践を進めてきた。今年度の指導内容は以下の通りである。

時期	指導内容等
4～5月	おがわ学ガイダンス(「おがわ学」の概要)、資料の調査法の学習 小川高校フィールドワーク(校外学習の予行演習)、小川高校の魅力発見、小川町立図書館見学、校外学習の予行演習、まちなか散策ツアー
6月～7月	図書館やPCを使用した資料調査、学校周辺フィールドワーク、小川町フィールドワーク、「総合的な探究の時間」中間発表会
8月～9月	日本の観光地(観光資源の調査)、小川町区長講話、小川町立図書館見学会、万葉モニュメント調査、調査結果の整理(データ入力)
10月～11月	小川町区長講話、小川町フィールドワーク、万葉集和歌報告会、万葉集プロジェクト発表会、おがわ学フォーラム
12月～1月	小川町立図書館長講話(万葉集と仙覚と小川町)、小川町の未来予想図、万葉集プロジェクト発表の動画撮影、マイプロジェクトアワード2021

イ. 体験的・課題解決的な学習活動

日本文化史研究では、年間を通じて「おがわ学」の取組を進めてきた。その中でも『万葉集』と関連が深かった探究活動として、代表的な実践例をいくつか紹介してみたい。



小川町立図書館見学会

《小川町立図書館見学会》

4月28日(水)、小川町立図書館の見学会を実施した。最初に視聴覚ホールで説明があり、図書館の施設や展示などを見学した。閲覧室・地下町民ギャラリー・おがわ仙覚万葉コーナーの3カ所を中心に、図書館職員の方々に案内していただいた。閲覧室では、蔵書の概要や利用の方法などを学んだ。おがわ仙覚万葉コーナーでは、仙覚律師が小川町の地を訪れて『万葉集註釈』を完成させた点について、新田文子館長から直々に解説していただいた。この見学会は、小川町と

『万葉集』の関係をすることを一つの目標にしており、小川町と『万葉集』の関係について、基本的な知識を得ることができた。

《小川町区長講話》

今年度は、NPO 法人あかりえのご協力を得て、小川町の方々と連携しながら授業づくりを進めた。小川町の地域ごとの特色を具体的に知るため、小川町の区長にご来校いただき、生徒に向けて、小川町の歴史や現状に関する講話をお願いした。9月22日(水)、八和田地区の山岸幸男氏が、思い出・お祭り・遊び・行事・テレビ・科学・高校生へのメッセージなどの講話をした。また、藁を使用したしめ縄づくり体験もした。10月13日(水)には、竹沢地区の笠原英彦氏が、地区の概要・暮らし・仕事・遊び・言葉・お祭り・季節の行事などの講話をした。10月27日(水)には、大河地区の福島由博氏が、生計・遊び・医療・伝承などの講話をした。さらに、12月1日(水)には、小川町立図書館に行って、小川町に関する総括的な内容として、新田文子館長から小川町や『万葉集』などに関する講話があった。年長者が体験した昔の小川町に関する話は、高校生にとって初めて耳にするエピソードばかりで、地域について深く知る機会が得られる貴重な場となった。



山岸幸男氏の講話



笠原英彦氏の講話

《万葉モニュメント調査》

小川町には、駅前のメインストリートを中心に、『万葉集』の和歌を紹介した万葉モニュメントが点在している。これは、小川町活性化プロジェクトの一環として設置されたもので、計70基を順番にたどれば、中城跡の仙覚律師遺跡を見学できるコースが設定されている。『万葉集』を探究する題材として、この万葉モニュメントに注目した。9月30日(水)、小川町駅の周辺に足を運んで、説明板に紹介されている和歌を記録していった。こうした作業を通じて、『万葉集』の和歌の一端に触れることができた。また、『万葉集』が小川町の地域資源の一つになっている現状なども確認することができた。調査結果は、グループごとに Google スプレッドシートに入力して、和歌本文・巻・歌番号・作者などの一覧表を作成した。

《小川町立図書館長講話》

10月28日(水)、小川町立図書館を訪問して、新田文子館長の講話を聞いた。今回は、「なぜ小川町が万葉の里か万葉集と仙覚と小川町」というタイトルで、小川町と『万葉集』について、仙覚の事績を軸にしながらか解説していただいた。小川町の専門家から説明を受けることで、『万葉集』の知識を深めて、探究の一助とすることができた。講話や質疑応答を通じて得られた知見は、グループごとに準備を進めている万葉集和歌報告会にも取り入れていった。

《小川町フィールドワーク》

今年度も、複数回にわたって小川町フィールドワークを実施した。小川町を多角的に捉えるため、小川町駅の商店街、小川町役場の周辺、栃本親水公園の一带、普段は行かない学校の裏手など、授業時間内に回れる範囲で様々な場所に足を運んだ。12月8日(水)のフィールドワークでは、小川町教育委員会の職員に案内をお願いして、中城跡・大塚八幡神社・穴八幡古墳・大梅寺などの史跡を見学した。中城跡には、仙覚の顕彰碑などがあり、仙覚律師遺跡として整備されている。鎌倉時代に、仙覚と称する僧侶が、小川町の地で『万葉集註釈』を編纂したことが改めて確認できた。小川町と『万葉集』を結ぶ存在として、仙覚の活動に注目しながら、地域にも視点を移して、小川町と『万葉集』の関係について掘り下げていった。



小川町立図書館長講話



小川町フィールドワーク

《万葉集 和歌 報告会》

小川町立図書館長講話なども踏まえて、万葉モニュメント調査で得られた一覧表をもとに、グループごとに好きな和歌を選択して調査させた。それぞれの和歌について、万葉モニュメントの通し番号・収録巻数・作者・大意（和歌の意味）・背景・和歌を連想させる小川町の情景・鑑賞（和歌の感想）を調べた。学校図書館やPCなどを利用しながら、クラスごとに4つのグループに分かれて作業を進めて、自分たちで選んだ和歌の内容を、報告会で発表していった。報告会の終了後は、評価シートに記入して、『万葉集』に関する理解を深めて相互に知識を共有した。

《万葉集プロジェクト発表会》

万葉集和歌報告会の評価や反省を踏まえて、その4グループを基本的な単位として、より具体的に小川町と『万葉集』を関連づけた探究を進めていった。「万葉集プロジェクト」と称して、『万葉集』に関連する企画や作品を創作するという条件で、作業を開始した。グループで相談しながら企画書を作成して、指導者のチェックと承認を受けた上で、それぞれの企画や作品の開発を進めていった。基本的に教員の助言は最小限に抑えて、生徒の自由な発想に任せることで、生徒の探究活動を見守ることを意識した。グループごとに作業の進捗状況には差があったが、完成した企画や作品は、万葉集プロジェクト発表会を開いて紹介した。各グループの発表は、①万葉集プリントTシャツ、②小川町のお祭りに飾る灯籠、③万葉タクシー、④古き良き1年を！計画というもので、それぞれの興味関心に応じた企画や作品が出揃った。いずれも『万葉集』を素材としたものだが、今年度はTシャツ・七夕まつり・細川紙・タクシー・カレンダー・紙芝居など、特にバラエティに富んだ提案が多かった印象を受ける。さらに、小川町の将来に向けた提言を含んだ発表もあり、現在の地域課題に対する解答を提示するような成果が得られた。

（3）分析と考察

1学期は、探究学習の基礎を固める段階として、調査や表現などの訓練を重ねてきた。小川町や小川高校に関する課題を提示して、学校図書館やインターネット等を利用して資料を探したり、現地に足を運んで記録をとったりしながら、多様な情報を集めて文章にまとめた。自身で資料を調べて整理する力を身に付けるのと同時に、地域社会に対する興味を高めることができた。

2学期には、小川町フィールドワークを実施して、地域社会に関する知識や関心などを培った。小川町駅を中心とする見学コースを決めて、地元の和紙を扱った店舗などを見学しながら、万葉モニュメントを確認して、小川町と『万葉集』の関係に注目した。また、小川町立図書館を見学したり、地域在住の方々の講話を聞いたりすることで、『万葉集』や小川町に関する基本的な知識を得ることができた。さらに、『万葉集』に焦点を定めて、グループごとに探究を進めていった。『万葉集』の和歌を調べるだけでなく、小川町と関連づけて何ができるのかを考えることができた。万葉集プロジェクトでは、小川町の特産品を調べて、『万葉集』と結びつけた新たな企画を考案する姿勢がみられた。

3学期には、最終的な課題として、小川町の未来予想図を作成した。また、万葉集プロジェクトの発表動画を改めて撮影し直して、来年度以降に使用可能な財産として残した。今年度の取組

を総括すると、小川町の課題に対する解決策や将来の発展に向けた計画など、地域的な問題に取り組んだグループが散見され、現代の小川町にも関連したテーマとして、『万葉集』の探究を進めることができたと評価できるだろう。

(4) 研究成果・今後の課題

ア. 研究成果

小川町の地域資源として、『万葉集』に取り組んで、①～④のグループごとに企画や作品などを発表した。小川町が抱える地域的な課題に踏み込んで、『万葉集』を通じた町づくりなどを提案できた。発表会では、小川町の将来に向けて、『万葉集』を通じた解決策を検討する視点が生まれたことが、特筆すべき成果として挙げられるだろう。①～④の発表内容は以下の通りである。

①万葉集プリントTシャツ

万葉集の和歌を印字したTシャツを開発した。和歌のデザインや衣服の種類などは自由に変更してよい。小川町で催される様々なイベントで着用することで、町おこしにも活用していきたい。また、万葉集グッズの商品化で経済的発展に貢献して、これを資金源として小川町の開発費用にも活用できる。

②小川町のお祭りに飾る灯籠

小川町の名物である七夕まつりで、『万葉集』の和歌を書いた灯籠を飾ることを計画した。灯籠の素材には、地元の特産品である細川紙を使用する。万葉集と細川紙をコラボさせた灯籠を並べることで、小川町の七夕まつりを盛り上げて、参加者の増加や『万葉集』の浸透などに貢献したい。

③万葉タクシー

ご当地タクシーは全国で見られるが、関東では初めての試みとして、万葉集を利用したタクシーを計画した。小川町に『万葉集』の和歌を描いたタクシーを走らせたり、座席にも和歌の解説を掲示したりする。こうして、小川町を訪れる観光客にも、タクシーの利用を促して、小川町と『万葉集』の関係をアピールすることができる。

④古き良き1年を！計画

『万葉集』を利用したカレンダーと紙芝居を企画した。カレンダーは、日常的に『万葉集』に触れる機会を提供できるのと同時に、商品化で得られた売り上げを小川町の発展に役立てることもできる。また、紙芝居では、『万葉集』の和歌を親しみやすく紹介することで、老若男女が和歌を身近に感じて楽しめる工夫を凝らした。

イ. 次年度へ向けての課題

また、今年度の授業実践では、教師が設定した方針に沿って誘導された一面があり、全体を通して、生徒が主体的に探究を進められたかといえば、大きな課題が残った。グループや生徒ごとに取組や意欲にも濃淡の差があり、生徒全員が地域課題などの認識を共有できたのかといえば、いささか心許ない部分がある。次年度は、「おがわ学」の理念を見つめ直して、問題意識や地域課題などを十分に浸透させた上で、授業実践の方針を見定めていく必要があるだろう。

7 総合的な探究の時間「総合歴史研究」

総合的な探究の時間 (総合歴史研究)	受講生徒:3年生23名	担当者:教諭 守田 亮
-----------------------	-------------	-------------

(1) 授業のねらい

ア. 目指す児童・生徒像

- ・自ら課題を発見し、深く考え、主体的に判断することができる児童・生徒
- ・小川町に対して愛着や誇りを持ち、小川町を含む地域に深く関われる児童・生徒
- ・多様な人々と協働し、課題の解決に取り組むことができる児童・生徒

イ. 授業の狙い

- ①小川町の歴史・文化・産業等を学び小川町が持つストロングポイントと課題について知る。
- ②フィールドワークを体験させることにより、郷土の文化を愛し、尊重する態度を育み、小川町のストロングポイントの活かし方と課題解決の方法を考える。


(2) 実施報告

ア. 実践授業の取組

月	時数	内容	備考
4	5	・授業開き&アイスブレイク ・小川町テスト及び小川町に関する講義 ・課題研究メソッド StartBook を活用した学習	
5	3	・課題研究メソッド StartBook を活用した学習	
6	1 1	・課題研究メソッド StartBook を活用した学習 ・フィールドワーク (駅周辺) ・フィールドワークの振り返り ・個人課題研究Ⅱ ・発表会 (授業内)	
7	1	・発表会 (授業内)	
9	9	・課題研究メソッド StartBook を活用した学習 ・講演会 (2回開催) ・しめ縄づくり体験	分散登校
10	5	・課題研究メソッド StartBook を活用した学習 ・個人課題研究Ⅱ	
11	1 1	・個人課題研究Ⅱ ・おがわ学フォーラム(代表者2名)	
12	5	・個人課題研究Ⅱ ・発表会 (授業内) ・おがわ学校内発表会	
1	6	・オンラインフォーラム参加 ・発表の振り返り ・地元をPR	

イ. 体験的・課題解決的な学習活動 (生徒の活動の様子)

- ・体験的学習活動
 - (1) しめ縄づくり体験
 - (2) 講演会
- ・課題解決的学習活動
 - (1) 小川町メモリーツリー作成
 - (2) フィールドワーク (駅周辺散策)
 - (3) 個人課題研究Ⅰ・Ⅱ

	<p>結論</p> <p>地域にとって自慢や誇りとなる歴史文化資源を活かし、小川町という歴史を繋いでいく。 なにより小川町に暮らす人々にとって意味のある場所に育てていく「町おこし」を行う。 町民の小さな試みや実践を積み重ね、周到な準備を整えて企業と協力する。 かつて行われていた町の催しを再開し活性化を図る。</p>
---	--

<h1 style="text-align: center;">小川町とジビエ</h1> <p style="text-align: center;">一時養鹿の可能性</p>	<h2 style="text-align: center;">考察</h2> <p style="text-align: center;">ここまでの過程を通じて私は</p> <h3 style="text-align: center;">「処理施設の設置」</h3> <p style="text-align: center;">を提案する</p>
	

(2) 分析と考察

授業の導入として、小川町テストと小川町に関する講義を行った。ここでは、生徒の小川町に関する基礎知識を教員側で把握する狙いと興味関心を抱かせる狙いがあった。

また、本年度は発表の土台となる力を定着させるために『課題研究メソッド StartBook』を活用した。ここでは、課題研究に際して、必要な能力を8つ設定し獲得を図った。

【必要な8つの能力】

1. テーマの設定方法
2. インターネットの有効活用法
3. 直接引用・間接引用・図表の引用法
4. 参考文献リストの書き方
5. 研究方法
6. 研究計画書の作成
7. 研究論文の作成
8. プレゼンの方法

1学期は上記の力を鍛え獲得することを目標とした。生徒は、『課題研究メソッド StartBook』を活用したことにより、8つの力を高めることができた。しかし、個人課題研究では、多くの生徒が調べ学習の延長線上で完結している成果物が多く見受けられた。ここで、授業内容を実践に生かすことの難しさを実感した。生徒だけでなく私自身もアドバイスをいただく機会はないかと周囲に相談したところ、NPO法人あかりえの谷口西欧氏を紹介していただいた。谷口氏からは生徒の成果物に対するアドバイスや授業内容について提案を受けた。この内容を自分自身と生徒個人に落とし込み、2学期に予定している個人研究Ⅱの発表にむけて準備を進めた。一方、コロナの影響で実施することが難しかったフィールドワークや講演会・体験学習を谷口氏の協力により実施することができ、自分たちと異なる価値観を持つ人びとに触れる機会をもつことができた。ここで学んだことを生かし、授業の集大成である個人課題研究Ⅱを行った。

個人課題研究では、1学期の課題が改善でき、谷口氏のアドバイスも十分に生きていた内容であった。研究内容はどれも独自性が高く、先行事例の調査や情報の整理もしっかりとできており、課題解決のプロセスもしっかりと踏めていた。また、発表時も『研究テーマの設定』『研究背景』『研究目的』『研究手法』『結果・考察』『引用参考文献』の構成ができており完成度の高い発表を聴くことができた。

(4) 研究成果・今後の課題

ア. 研究成果

- ・生徒が自ら問いを立て、課題解決ができた
- ・生徒が小川町だけでなく自分が居住している地域に関する興味関心を高めることができた

- ・課題研究を通して研究方法やプレゼン法を取得できた
- ・卒業した後も地域の課題解決について関わりたいと考える生徒を出すことができた
- ・『越境×探究！未来共創 プロジェクトフォーラム』で価値観の外側にいる人たちと交流でき、教員・生徒の視野をひろげることができた
- ・受講生徒が MY PROJECT AWARD 2021 東日本 Summit へ参加

イ. 今後の課題

- ・自分たちとは異なる価値観を持つ人々との交流
- ⇒『越境×探究！未来共創 プロジェクトフォーラム』などのフォーラムに全生徒が参加できる機会を創出

授業を通して本校生徒のおがわ学に対して前向きな気持ちを強く感じる事ができた。来年度は生徒が積極的に学校外に出ることや地域の方などと交流できる場を設定すべきだと感じた。様々な価値観に触れることにより、教員や生徒が自分自身と向き合う機会が増えるのではないか。この経験がヒントとなり日々の生活や人生が変わる可能性があるのではないか。次年度は生徒を積極的に外へ出していくべきだと思う。

8 総合的な探究の時間「総合社会研究」

総合的な探究の時間 (総合社会研究)	受講生徒:3年生9名	担当者:教諭 小泉 昇一
-----------------------	------------	--------------

(1) 授業のねらい

小川町の活性化のために、町の魅力を発信し集客を図ること。そして、将来小川町に移住して生活していくための手立てに取り組むことをねらいとした。

本授業では1学期で「おがわ町巡り旅」旅行企画に、2学期で「おがわ町で起業する」企画に取り組むことで、小川町の活性化を探っていくとともに、生徒には情報分析力や思考力、判断力、さらに他者と協働する態度や企画力、そして表現力を養っていく。

(2) 実施報告

ア. 実践授業の取組

- ・1学期:「おがわ町巡り旅」旅行企画～小川町の魅力を発信して集客につとめること。
3人1組で小川町の魅力を生かした旅行企画を考える
小川町を知る…資料の読み取り、観光案内所や駅周辺のフィールドワーク
スライド作成 発表
- ・2学期:「おがわ町で起業する」
小川町に移住(定住)するために町の特徴を生かした新たなビジネスの創造
1人で小川町の特徴や課題を生かした新たなビジネスを企画する。
小川町の特徴や課題について調べる…関係資料の読み取り、観光案内所や役場からの情報提供
スライド作成 発表
- ・3学期:総括

イ. 体験的・課題解決的な学習活動

- ・「おがわ町巡り旅」旅行企画では3人グループで話し合い、企画検討、役割分担、資料の読み込みなどを行ったり、企画策定のため観光案内所訪問及び駅周辺のフィールドワークを実施した。小川町出身を問わず、改めて小川町の特徴・魅力を知り生徒にとっては新鮮であったようである。とくにフィールドワークでは自らが計画した施設見学や聞き取り調査は旅行企画に取り組むうえで効果的であったと思われる。
- ・「おがわ町で起業する」では各自が企画検討のため図書館の資料や観光案内所や役場から提供された資料を読み込むなどを行った。今回は企画、スライド作成、プレゼンテーションと一人ですることもあり、それぞれが主体的に取り組んだ。



観光案内所「むすびめ」での説明



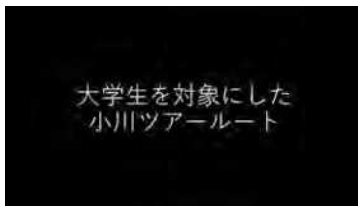
老舗訪問での聞き取り調査



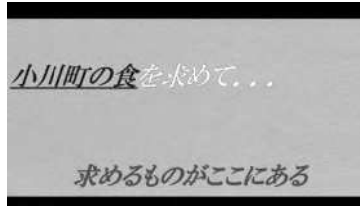
町おこし施設

ウ. 学習成果物

- ・「おがわ町巡り旅」旅行企画（スライド表紙）



大学生を対象にしたおがわ町の旅



おがわ町の食を巡る旅

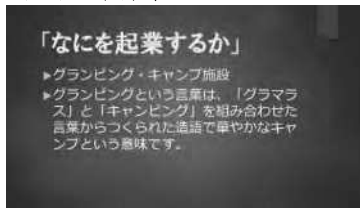


大人対象の少し贅沢な旅

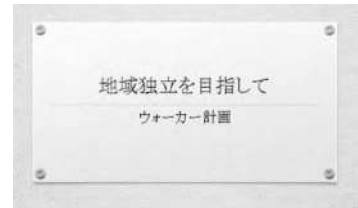
- ・「おがわ町で起業する」企画（スライド表紙）



さつまいものブランド化



自然を生かしたキャンプ事業



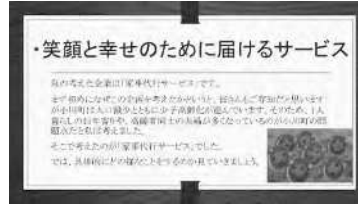
地産地消目指して



自然を生かしたテーマパーク



空き家を生かした民泊業



高齢者への代行サービス

(3) 分析と考察

- ・企画にあたり、「むすびめ」（観光案内所）の方の説明やフィールドワークは生徒にとって効果的であった。
- ・プレゼンの経験は自信につながったが、自らの考えをうまく伝えるのは難しいと実感していた。
- ・「おがわ学」を通して小川町を知ることができた。
- ・仲間との企画・スライド作成・プレゼンでは互いに意見を出し合い、様々な意見や考え方があふれることに気づいた。
- ・リハーサルも含め、プレゼンの機会が多かったことで全体的にプレゼン能力は上がったが、そのことで自らの企画の未熟さが浮き彫りとなった。
- ・1学期のグループ企画に比べ、2学期の個人企画のほうが独善的になりがちで、難しかったと気づいた。

(4) 研究成果・今後の課題

- ・個人企画とグループ企画両方で取り組ませたことは、企画を主体的・客観的に考える上で効果

的であったと考える。

- ・生徒一人一人の発表力の自信は自らの企画に対する未熟さを浮き彫りにするとともに、向上心を醸成する機会となった。
- ・体験学習やフィールドワークは効果的であり、授業の中での実施頻度や内容等いかに組み入れていくが大切である。
- ・より効果的な資料や情報提供、体験活動及び適切な助言が生徒の自由な発想を拓く環境づくりとなるため、教員側のさらなる準備や指導力が必要である。

9 総合的な探究の時間「数学研究」

総合的な探究の時間 (数学研究)	受講生徒:3年生17名	担当者:教諭 田島 正悟
---------------------	-------------	--------------

(1) 授業のねらい

今日、情報化社会となり、他者とのコミュニケーション能力が求められるような時代となった。生徒たちがそんな社会に出たときに、自分の意見や考えを他者にわかりやすく伝えられることが大事であり、それはおがわ学を学ぶ際も同様である。この授業では探究活動に必要な不可欠な力をさらに伸ばすべく、数学的題材だけでなく地域の題材にも触れることを目的とした。また、机上の空論にならぬよう、Plan→Do→Check→Actionのサイクルも意識しながら、試行錯誤を繰り返すことを意識した。

受講生徒は全員、進学選抜クラス理系の生徒であり、本校ではトップクラスの学習意欲を誇る。また、数学的関心も高く、授業では積極的に意見が飛び交い、非常にいい雰囲気の議論になることが多かった。質問された生徒も、それに対応すべく、自身の持つ知識をフル活用して一生懸命答えを出す姿は、意欲に溢れたものであった。

(2) 実施報告

ア. 実践授業の取組

1学期は、実際の数学の入試問題や検定問題を配り、いくつかのグループに分かれて問題を担当し、クラスメイトに解法や考え方を説明する練習を行った。

	取組内容
1学期前半	4～6人グループでの議論・発表活動
1学期後半	2～3人グループでの議論・発表活動
2学期前半	各自設定したテーマに関する探究活動(調べ学習)
2学期後半	校内発表・おがわ学フォーラム
3学期	1年間のまとめと振り返り

イ. 体験的・課題解決的な学習活動

グループ活動では、積極的に自分の意見を言い合うことができ、活発なものとなった。

校内発表会の様子



校舎の高さを測定しよう（他の対象物も測定しました）



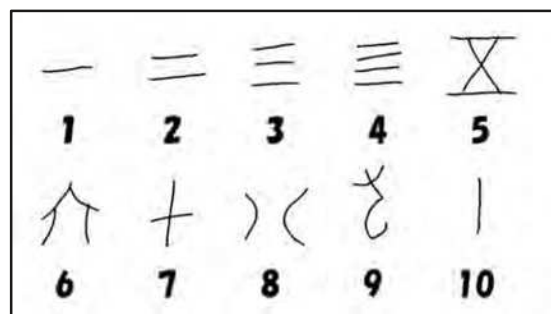
おがわ学フォーラムでの発表（メガソーラー計画についての考察）



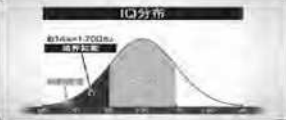
ウ．学習成果物

生徒自身で設定した数学に関するテーマで、レポートを作成し、発表した。そのレポートは、3学期に本校図書館にて展示をし、教職員・在校生の皆が手にとって見ることができるようにした。

生徒たちの作成したレポート



知能指数



知能指数とは、数字で表した結果の表示方式の一つで知能が高いほど数字が大きく、知能が低いほど数字が小さい。

- 角速度 (ω) とは1秒間に回る角度
- 周期とは1回転にかかる時間

音速(音の伝播速度)	時間	回転数	角速度(ω)	周期
遅い	62秒	23回	133°C	2.69秒
標準	55秒	37回	243°C	1.48秒
早い	47秒	48回	371°C	0.97秒

QRコードの発見 教員: 藤本

「QR」 Quick Response code (迅速反応コード)

QRコードは「2D」の技術で、紙の表面に印刷された正方形のマトリクスに、縦横の黒い線を組み合わせることで、従来の1次元バーコードよりも多くの情報を記録できる。

QRコードの利点 (利便性)

1. 印刷コストが安い (紙の表面に印刷)
2. 読み取りが容易 (カメラで撮影)
3. 容量が大きい (1次元バーコードよりも)
4. 偽造が難しい

利点: 容量が大きい (1次元バーコードよりも)

利点: 読み取りが容易 (カメラで撮影)

利点: 容量が大きい (1次元バーコードよりも)

利点: 偽造が難しい



QRコードの発見 教員: 藤本

QRコードは「2D」の技術で、紙の表面に印刷された正方形のマトリクスに、縦横の黒い線を組み合わせることで、従来の1次元バーコードよりも多くの情報を記録できる。

QRコードの利点 (利便性)

1. 印刷コストが安い (紙の表面に印刷)
2. 読み取りが容易 (カメラで撮影)
3. 容量が大きい (1次元バーコードよりも)
4. 偽造が難しい




QRコードの発見 教員: 藤本

QRコードは「2D」の技術で、紙の表面に印刷された正方形のマトリクスに、縦横の黒い線を組み合わせることで、従来の1次元バーコードよりも多くの情報を記録できる。

QRコードの利点 (利便性)

1. 印刷コストが安い (紙の表面に印刷)
2. 読み取りが容易 (カメラで撮影)
3. 容量が大きい (1次元バーコードよりも)
4. 偽造が難しい

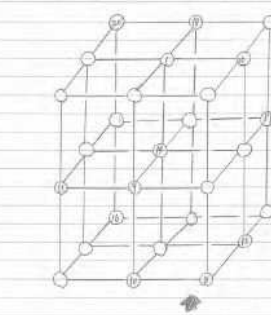


QRコードの発見 教員: 藤本

QRコードは「2D」の技術で、紙の表面に印刷された正方形のマトリクスに、縦横の黒い線を組み合わせることで、従来の1次元バーコードよりも多くの情報を記録できる。

QRコードの利点 (利便性)

1. 印刷コストが安い (紙の表面に印刷)
2. 読み取りが容易 (カメラで撮影)
3. 容量が大きい (1次元バーコードよりも)
4. 偽造が難しい



上段: 20, 18, 17

中段: 1, 26, 14

下段: 11, 9, 10, 8

数学の発展と数論

数学の発展は、数論と密接に関連している。数論は、整数の性質を研究する分野であり、素数や因数分解などの問題を扱う。数論は、現代数学の重要な分野であり、暗号理論や物理学にも応用されている。

数論の歴史

数論は、古代から研究されてきた分野であり、ギリシャの数学者ピタゴラスやユークリッドが重要な貢献をした。中世には、インドの数学者が十進法やゼロの概念を導入し、数論の発展に貢献した。

現代の数論

現代の数論は、高度な数学的技術を用いて研究されており、素数分布やフェルマーの最終定理などの未解決問題に取り組んでいる。数論は、数学の基礎を築き、他の分野にも大きな影響を与えている。

(3) 分析と考察

4月当初は、なかなか自分の意見を堂々と話したり発表したりすることが難しかった生徒が多かったが、1学期のうちから解法や自分の考えを発表する機会を設けたことにより、発表に対する抵抗感が少しずつなくなっていったと思われる。さらに、毎回必ず質疑応答の時間を設け、自由に意見を交換させるように心がけた。教員も時折発表を聞くのに交じり、考察を深められるような質問を投げかけることで、数学的な知識だけでなく臨機応変に対応する力も身に着けさせた。その効果もあってか、発表する側・聞く側双方からさまざまな議論が飛び交うようになり、活発な意見交換の場となった。

2学期には、自分でテーマを設定し、それについて数学的に考察を深め、発表をした。「数字の

歴史」「漢数字の成り立ち」「数学パズルの考察」「世界の数学者ランキング」「IQについて」「QRコードについて」「比企地区のメガソーラー計画の一考察」など、テーマは多岐にわたった。特に、「メガソーラー計画」についての考察は、講座代表として11月に行われたおがわ学フォーラムにて一般公開をし、そこでも様々なご意見を頂き、「とても勉強になった、まだまだ調べ不足だということを痛感した。」と、発表した生徒自身にとっても貴重な経験となったようである。

(4) 研究成果・今後の課題

今年度、私は初めて総合的な探究の時間の担当となった。幸いにも、非常に好奇心旺盛で反応も豊かな生徒たちであったので、非常にやりがいもあり、どちらかと言うと共に学び続けてきた、と言ったほうがよいのかもしれない。週3時間という単位数ではあるものの、Chromebookの台数制限や分散登校、授業変更など様々な事情があったが、出来る限り生徒たちの知見を広めるべく、色々なことを試行錯誤してきた。4月当初に比べて、自分の考えを持ち、他者にしっかり伝え、話す能力が上がったと思える。探究活動と数学力をつけていけるような授業づくりしていきたい。

10 総合的な探究の時間「くらしと科学」

総合的な探究の時間 (くらしと科学)	受講生徒:3年生7名	担当者:教諭 新井 英男
-----------------------	------------	--------------

(1) 授業のねらい

小川町の特産である小川和紙の新商品を開発するという壮大な目標のもと、まずは基本的な和紙づくりのイロハからできることを学んでいく。

(2) 実施報告

ア. 実践授業の取組

月	時数	内容	用意した物
4	3	和紙の特徴と作り方の工程を学ぶ	プリント
	2	トロロアオイ栽培開始(水やり、観察は授業の合間に折に触れ行う。)	DVD
5	2	和紙学習体験センター「楮引き」	種、土、栽培箱
	2	牛乳パックによる紙漉き(はがき版)	
	2	和紙漉き(はがき版)	
	2	和紙学習体験センター「ちりとり」	プリント
6	2	学校で紙すき	
	2	和紙学習体験センター「小版紙すき」	プリント
	2	こんにゃく糊塗布	
	2	和紙学習体験センター「大版紙すき」	プリント
7	2	柿渋塗布	
	1	和綴じノート制作	プリント
	2	1学期まとめ	
8	2	発表	
	2	夏休みの課題として2学期に行う、和紙の新しい製品について考察し、まとめておく	プリント
9	2	夏休みの課題の発表	
	2	伝統工芸会館に見学に行き新製品のアイデアを練る。	
10	2	新製品の具体化を練る。(図書館を利用)	
	2	うちわ制作(紙すき)	
11	4	うちわ制作(染色)	プリント
	2	うちわ制作(貼り付け)	楮、アグリパース
11	2	マスクケース制作(紙すき)	刷毛、絵の具、
	6	マスクケース制作(染色)	柿渋、

	3	マスクケース制作 (柿渋塗布)	
	2	発表のためのまとめ	
	2	発表 (練習)	
	2	おがわ学フォーラム発表	
		マスクケース制作	
	3	半年間の考察及び感想	
	2	おがわ学校内発表会	
12	2	1年間のまとめ	
	2	展示、他講座見学	
1	2		

イ. 体験的・課題解決的な学習活動(生徒の活動の様子)

- ① **和紙学習体験センター**での実習は有料ではあったが、計4回に分けて行っていただき貴重な経験をさせていただいた。紙を漉くまで、漉くとき、漉いてからそれぞれ経験と大変さを再認識した。
- ② **牛乳パックによる紙漉き**では、やはり座学より作業をしている時の生徒の生き生きした様子が印象的であった。はがき版は大きさが小さいので難易度としては簡単な部類であるが、2学期に行う本格的な紙漉きのリハーサルとしては上々であった。
- ③ **夏休みの和紙の新製品開発の課題**では、いろいろ夏休み中にネットですすでにある和紙製品を検索して、各自新たなものを考えてくるように言ってあった。しかし、なかなか期待したほどには新たな発想が無かった。今年は、うちわとマスクケースを試作することにした。
- ④ **実際の紙漉き**では昨年、版がはがき版からA4、B4、30cm四方、A3と大きくなるにしたがって難易度が増すので相当苦労していたので一番漉きやすそうなB4版で行った。
- ⑤ **マーブリング、墨流し**では、美術的な感じではあったが、毎回異なる模様が出来て、生徒は、楽しそうに取り組んでいた。
- ⑥ **揉み紙づくり、柿渋塗布**では、紙の表面加工として重要な過程であり今年の総学では紙漉きの次に重要なポイントであった。生徒たちも良く取り組んでくれたと思う。
- ⑦ **うちわ制作**では、特に新商品というわけではないが、ものつくりの練習を兼ねて骨は購入し和紙を漉いて染色を施し貼り付けることでうちわを作った。
- ⑧ **マスクケース製作**では昨年同様、今回も全員共通課題として制作させた。各自が漉いた紙を染色し折って糊付し制作させた。昨年から改良したところは、昨年は抗菌性の柿渋を塗布した和紙一枚で作ったのだが、茶色い色しか出せず見栄えがイマイチだったところから、紙を2枚合わせにし内側のみ抗菌性の柿渋塗布とし外側は無地に染色を施した。

ウ. 学習成果物



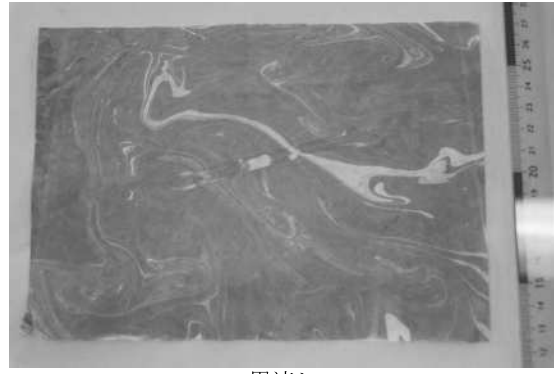
うちわ制作 (マーブリングやちぎり絵を施した)



和綴じノート制作



マーブリング



墨流し



昨年度のマスクケース



今年度のマスクケース（外はマーブリング染色）



内側に柿渋染め（二重構造）

（3）分析と考察

○今年もコロナの影響で授業が2学期はじめ予定していた内容が出来なかった。予定では、ここで和紙を学校でたくさん漉いて染色その他もっと時間をかけて考察するはずであった。このことがまず今年度思ったような結果や成果が出せなかった大きな原因の1つであろう。

○計画その②として、トロロアオイを加えた紙漉きの水溶液の粘度測定を1つの大きな柱として考えていたが、なぜか今年はトロロアオイ栽培がうまくいかず、結局、数値的な粘度測定も出来なかった。

（4）研究成果・今後の課題

ア. 研究成果

今年度の大きな成果は、学校で漉けるサイズ(B4,)の漉き桁を使用して今後の製品開発に向けて学校で生徒が紙を漉くのに慣れてきたので、その紙を使った製品作りの可能性が開けた。

また、紙の加工としての、コンニャク糊を用いた揉み紙や柿渋塗布などの他マーブリング手法がかなり効果的染色方法として見いだせたこと。

イ. 次年度にむけての課題

- ①学校で紙を漉くために、センターの方に来校していただき、学校の道具で紙を漉いてもらい、粘度を含め再現出来るデータを取得する。
- ②トロロアオイ栽培を引き続き行い、クレゾール無しの保存及び効果的な使用方法を開発する。
- ③新製品の模索検討と試作
- ④楮栽培をどうするか検討

11 総合的な探究の時間「OGAWA 健康スポーツ学」

総合的な探究の時間 (OGAWA 健康スポーツ学)	受講生徒:3年生11名	担当者:教諭 原 淳一 教諭 菊地 良輔
--------------------------------------	--------------------	---------------------------------

(1) 授業のねらい

- ・地域に根差すような老若男女、誰もができる小川町独自の NEW スポーツを考案・指導し、小川町の人々の健康に寄与することでスポーツがもつ可能性を知る。
- ・生徒が地域に興味をもち、これまでの学んだ知識を活用して問題解決をする。

(2) 実施報告

ア. 実践授業の取組

月	学習内容	具体的な学習活動	活動形態
4月	体育指導論・実践①	体づくり運動の指導実践・体育祭新種目考案	個人・グループ発表
5月	体育指導論・実践②	体づくり運動の指導実践・体育祭新種目プレゼン	個人・グループ発表
6月	体育指導論・実践③	球技の指導実践	個人・グループ発表
7月	体育指導論・実践④	球技の指導実践	個人・グループ発表
9月	おがわ学と体育①	おがわ NEW スポーツ考案・作成・校内実践・改善	ゼミ・グループ
10月	おがわ学と体育②	おがわ NEW スポーツ校内実践・改善・指導方法研究	ゼミ・グループ
11月	おがわ学と体育③	おがわ NEW スポーツ指導方法研究・評価改善、1年生で NEW スポーツの模擬授業	ゼミ・グループ
12月	おがわ学と体育④	おがわ NEW スポーツ実践・改善・現場での指導方法研究(みどりが丘小学校にて指導)、おがわ学フォーラムでの発表	ゼミ・グループ発表
1月	おがわ学のまとめと発表・展示	1年間のまとめや振り返りを行い、その成果物を展示・発表する。生徒主導で球技を行う。	個人・グループ発表

イ. 体験的・課題解決的な学習活動

・みどりが丘小学校での NEW スポーツ出前授業の様子



みどりが丘小学校の6年生に協力を得て、出前授業を行った。一学期に繰り返し練習した指導の技術を活用して、二学期に考案したNEWスポーツ「OGW ベース」を題材に授業を行った。本来、グラウンドでの実施予定であったが、悪天候のため急遽体育館での実施となった。

・テニスの指導実践の様子

授業のなかで教師役、生徒役に分かれて、指導の練習を行った（体づくり運動、球技）。実践終了後、リフレクションを行い、指導能力向上に努めた。



おがわ学フォーラム様子

指導実践やNEW スポーツの説明。



ウ. 学習成果物

「おがわ町で老若男女愛されるスポーツ」を念頭に、生徒自ら NEW スポーツを考案させた。その際にルールを何度も改善させ、スライドにまとめさせた。また、実際に NEW スポーツを小学校に出向いて指導し、一年間の振り返りと共に指導内容の振り返りを行った。

・おがわ学フォーラムで発表したスライド NEW スポーツのルールや指導案等をまとめたもの

NEWスポーツの名前

・OGWベース

O ffence (攻撃)

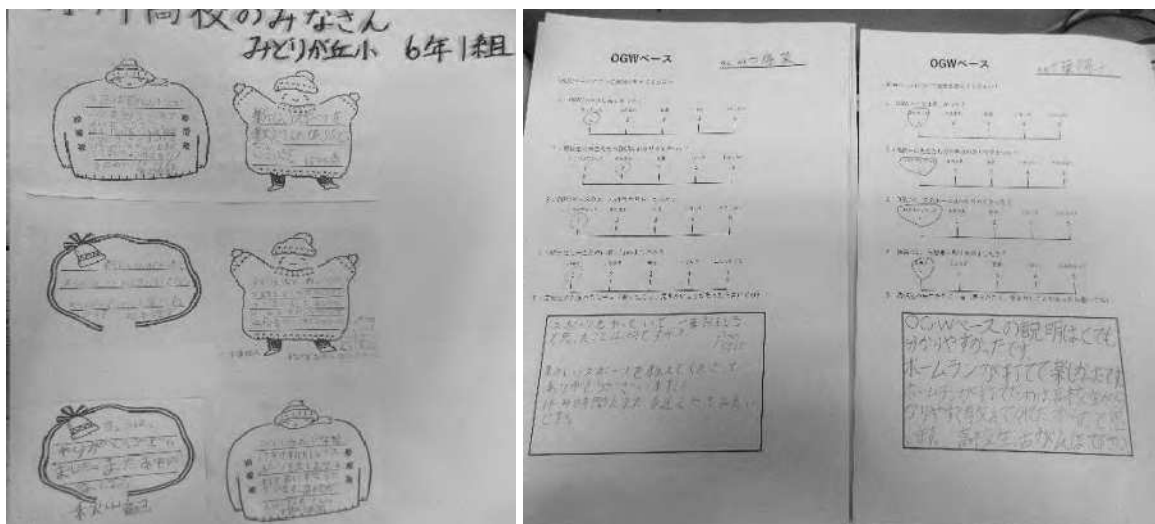
g uard (守り)

w arriours (戦士)

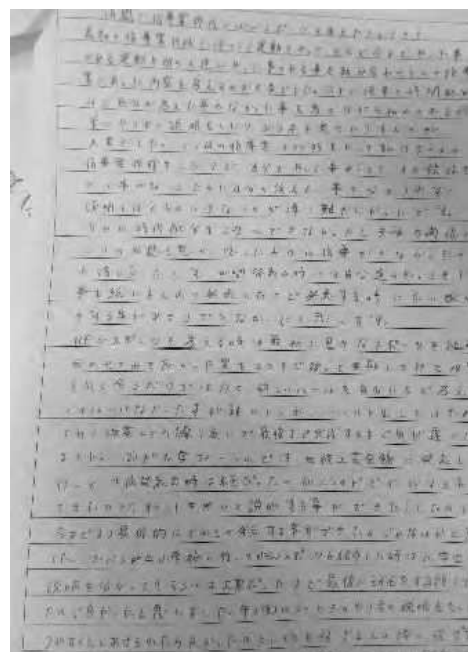
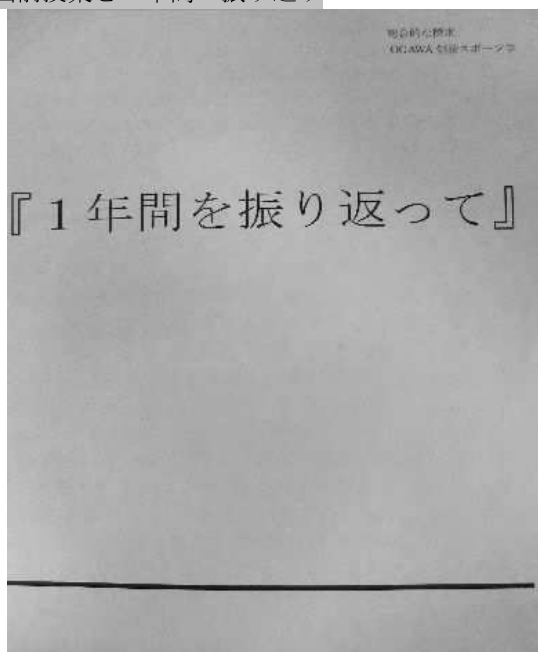
学年	学習内容・活動	指導上の留意点(指導者・保護者)
4	1. 基本動作、攻撃、守りの練習 2. 実際のゲームに近い状況での練習	①基本動作の指導は丁寧に行う ②攻撃と守りの動きを明確にする ③ゲームに近い状況での練習は慎重に行う
5	①ゲームに近い状況での練習 ②実際のゲームに近い状況での練習	OGWベースのルールをしっかりと理解させる ①実際のゲームに近い状況での練習は慎重に行う ②実際のゲームに近い状況での練習は慎重に行う ③実際のゲームに近い状況での練習は慎重に行う
6	①ゲームに近い状況での練習 ②実際のゲームに近い状況での練習	OGWベースのルールをしっかりと理解させる ①実際のゲームに近い状況での練習は慎重に行う ②実際のゲームに近い状況での練習は慎重に行う ③実際のゲームに近い状況での練習は慎重に行う
7	①ゲームに近い状況での練習 ②実際のゲームに近い状況での練習	OGWベースのルールをしっかりと理解させる ①実際のゲームに近い状況での練習は慎重に行う ②実際のゲームに近い状況での練習は慎重に行う ③実際のゲームに近い状況での練習は慎重に行う
8	①ゲームに近い状況での練習 ②実際のゲームに近い状況での練習	OGWベースのルールをしっかりと理解させる ①実際のゲームに近い状況での練習は慎重に行う ②実際のゲームに近い状況での練習は慎重に行う ③実際のゲームに近い状況での練習は慎重に行う
9	①ゲームに近い状況での練習 ②実際のゲームに近い状況での練習	OGWベースのルールをしっかりと理解させる ①実際のゲームに近い状況での練習は慎重に行う ②実際のゲームに近い状況での練習は慎重に行う ③実際のゲームに近い状況での練習は慎重に行う
10	①ゲームに近い状況での練習 ②実際のゲームに近い状況での練習	OGWベースのルールをしっかりと理解させる ①実際のゲームに近い状況での練習は慎重に行う ②実際のゲームに近い状況での練習は慎重に行う ③実際のゲームに近い状況での練習は慎重に行う

・みどりが丘小学校児童からのお礼のメッセージ

・OGW ベースについての児童アンケート



・出前授業と一年間の振り返り



(3) 分析と考察

授業開始時には生徒は指導に関して全く知識のない状態からのスタートであったため、最終的に形になるか、非常に厳しいものがあった。また、本講座の受講者には、学習に苦手意識を持つ生徒も少なくないため、主体性をもった学習が非常に難しいのが現状であった。

最終的なゴール地点を小学生への NEW スポーツの指導とし、一学期の中で徹底的に模擬授業やリフレクションを行い、お互いに改善点を指摘し合う中で指導論を学ぶことによって自らの未熟さを痛感し、学習に自ら取り組む姿勢を確立させることができたのではないかとと思われる。また、その中で生徒をまとめる技術や目的に向けた練習内容を考える等、指導者としての技術が早い段階で培われたことは大きかったように思える。

二学期には実際に NEW スポーツ考案から小学生への指導までを行ったわけだが、自由度を与えすぎたため、NEW スポーツ考案に非常に苦戦した。そのため、こちらでもう少し大まかな枠組みを指定することによってもっとスムーズに NEW スポーツが考案できたように思われる。ルールを作っていく上でもこちらのアドバイスがあれば動き出すことができたので、如何にヒントを与えてあげられるかが重要だと分かった。

実際に小学生に指導した際には、始めは緊張で上手くいかなかったものの児童と打ち解けていく中で良い指導ができ、それが成功体験となり、自信をもって後半の指導を行うことができた。二時間続きの授業を終えた生徒達は自信にあふれた清々しい顔つきをしていて、精神的に大きく成長したように思える。振り返りをさせた際には「この経験を活かして積極的に頑張りたい」といった言葉も出たため、本講座のねらいに沿った結果となったと思う。

(4) 研究成果・今後の課題

ア. 研究成果

- ・生徒が指導に関する自らの改善点を友人と考え、よりよい授業を探究する中で学びに向かう姿勢や指導技術の向上を図ることが出来た
- ・小学生と交流したことで地域に興味関心をもち、生徒の視野を広げることが出来た
- ・地域に NEW スポーツを紹介し、広めることが出来た
- ・運動が苦手な児童の前向きに取り組む姿勢から、特にスポーツの心に与える影響に関して直に感じる事が出来た

イ. 今後の課題

OGAWA健康スポーツ学の講座を初めて担当したため、手探り状態で計画を立ててなんとかゴール地点までつなげたため、ところどころ粗削りであったように思える。来年度は残念ながら開講はないが、また開講する際にはもう少し順序立てて丁寧にしていきたい。その際、可能な限り、一学期から NEW スポーツ考案に取りかかることが出来るとある程度余裕をもっていけるかと思う。また、次に NEW スポーツを考案する際にはより小川町に根差したものとなるように小川町の資源も活かしていきたい。

小学生と交流させたことによって大きな自信を得た生徒もいたため、次回開講される際には外部との交流も増やし、生徒の成功体験を得る機会、視野を広げる機会を多く作っていききたいと思う。そして、その中で同時に主体性も育てていきたい。

12 総合的な探究の時間「町に届ける演奏会」

総合的な探究の時間 (町に届ける演奏会)	受講生徒:3年生10名	担当者:教諭 北風 秀和
-------------------------	-------------	--------------

(1) 授業のねらい

小川町の課題解決として音楽に何ができるか考え、実践すること。

(2) 実施報告

ア. 実践授業の取組

小川町のために音楽で何が出来かを考え、小川町をPRするためのMV(ミュージックビデオ)を作ることになった。MVのテーマは「自然の中で遊ぶ楽しさを伝える」である。MV中では生徒が「放課後自然部」という架空の部に所属していて、放課後に自然の中で遊ぶ部の活動を映像にした。この講座は音楽の講座のため、MVの音楽、歌詞もオリジナルで作った。全生徒10人が書いたメロディーのいいところを抜き出して組み合わせ、足りないところは教員が補って一つの曲にまとめた。

1学期・・・MVの内容について考え、様々な動画や音楽を研究し、曲を作った。

2学期・・・歌詞を考え、絵コンテを作り、撮影、編集、録音を行った。

3学期・・・Youtubeに載せる「タイトル」、「説明文」、「サムネイル」、「ハッシュタグ」を考えた。

イ. 体験的・課題解決的な学習活動

<体験的な学習活動>

- ・「小川げんきプラザ」、「栃本親水公園」、「見晴らしの丘公園」での自然体験(遊び)

※「小川げんきプラザ」での自然体験では、小川げんきプラザの伊藤様、サンデンフォレストの山田様に大変お世話になった。

- ・MVを作る（話し合い、作詞作曲、絵コンテ作成、撮影）

<課題解決的な学習活動>

- ・MVを作り、Youtubeに載せる

MVを多くの人に見てもらい、MVがきっかけで小川町を知り、人が来てくれれば、少し課題解決的に繋がるのではないかと。MVを作ることになるまでの話し合いも非常に時間がかかったため、このことも大切な課題解決的な学習活動と考える。

ウ. 学習成果物

小川町PRミュージックビデオ「放課後自然部」 Youtubeにアップする予定

(3) 分析と考察

MVを作る過程では多くのことを学んだのではないかと。皆で意見を出し合い（この講座は半分以上が話し合いである）、長期間に渡って一つの作品を創り上げ、その作品がYoutubeに上がるようになった。高校生の時に頑張った経験として生徒の中に残るのではないかと。また、大人になっても動画を見られるので当時を思い出すきっかけにもなるだろう。

話し合いでは自分の意見を持ち、発表することが非常に重要である。いろんな人の様々な考えを共有することで、チームで作品を創り上げることができる。皆で同調して「いいと思います」と言っているのは、いいものは出来ない。その辺のところも、この講座を通してわかってもらえたのではないと思う。また、全生徒10人が作ったメロディーを使って曲を完成させているので、今回のMVはこのメンバーだからこそ出来た作品だと言える。人と力を合わせれば自分1人ではできない大きなことができるということも覚えてほしい。

MVのテーマは「自然の中で遊ぶ楽しさを伝える」である。自然の中の体験では生徒がいつもよりも伸びやかに積極的に活動をしている様子が見られた。これが正に自然の力ではないかと思う。自然の中にいることで心も体もほぐれたのだろう。MVの中では、生徒が素で自然を楽しんでいる様子が見られる。MVの中にいる生徒自身が自然の魅力をわかってもらえたことはとても重要なことのように思う。それは「魅力は近くにあるが、それを忘れていたということに気づいた」といことでもある。それはいろんなことに当てはまるだろう。MVを見た人が自然の魅力を知り、または思い出し、小川町に来てもらえたら嬉しく思う。

(4) 研究成果・今後の課題

MVをYoutubeに載せることで、小川町の魅力を世界へ発信する機会を作ることができた。おがわ学で生徒それぞれが考えることはすごく有意義なことであるが、それを学校外に発信することができないことが個人的な昨年度の反省であった。昨年度の課題を解決できた点はよかったと思う。

本来、この講座は町の高齢者福祉施設等で演奏会を行う講座である。来年度は魅力的な演奏会を企画し、お客さんに喜んでもらいたい。

13 総合的な探究の時間「生活と美術」

総合的な探究の時間 (生活と美術)	受講生徒:3年生32名	担当者:教諭 新井 三千夫
----------------------	-------------	---------------

(1) 授業のねらい

- ・日常生活において商品がどのような過程を経て私たちの手元に入るのかを考察する。
- ・デザインや色彩が生活に及ぼす影響を考えながら、表現力を向上させる。
- ・造形活動を体験しながら知識を総合的に働かせ、社会に出て役立つ創造力を伸ばす。
- ・職業に必要な慎重さや丁寧さを身に付け、探究心や向上心を養う。

(2) 実施報告